

4 学年次生に対する卒業時のアンケート集計結果のまとめ

- アンケート実施日：令和3年2月15日～3月6日（20日間）
- 学生数：102名 google フォームにて上記期間に実施
- アンケート回収数（率）：99部回収（97.1%）

KEYPOINT

卒業生が愛知医科大学看護学部のカリキュラムについて高い評価をした項目

- ・成績の基準がシラバスで明確にされている
- ・看護について理解が深まる学習内容が充実している
- ・実習施設が充実している

卒業生が愛知医科大学看護学部のカリキュラムについて低い評価をした項目（今後の課題）

- ・国外の看護実践に目を向ける学習内容が充実している
- ・国際的保健・医療活動に目を向ける学習内容が充実している
- ・学生の個性を伸ばす教育方法が工夫されている

ディプロマポリシーの達成状況について

- ・9項目全てで達成度の高い卒業生が80%を超えた。

学生生活のサポートについて

- ・卒業生の評価の高かった項目は、事務職員の相談・支援体制と国家試験対策
- ・課題は、就職支援対策とアドバイザー制度
- ・学食について評価の低い卒業生が多かった。

愛知医科大学看護学部での学生生活の満足度

- ・平均81.6%

I. 看護学部のカリキュラムおよびシラバスの構成について

カリキュラム評価に関する項目で卒業生が“そう思う”と回答し評価の高かった項目は、「成績の評価基準についてシラバスに明確に示されている」（73.7%）、「看護について理解が深まる学習内容が充実している」（70.7%）、「実習の施設は充実している」（66.7%）であった。一方で、「あまりそう思わない」「そう思わない」といった低い評価の回答が多かった項目は、「国外の看護実践に目を向ける学習内容が充実している」（31.3%）、「国際的保健・医療活動に目を向ける学習内容が充実している」（25.2%）、「学生の個性を伸ばす教育方法が工夫されている」（20.2%）であった。また、各学年の授業科目の配置についても、評価の低い回答が1年生（17.2%）、2年生（36.4%）の科目で多かった。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、今年度は国際交流の機会がなかったが、国際看護に関する項目は昨年度も低い評価の回答が30%を超えており、国際的な視点を養う教育内容について充実させていく必要があると考えられた。また、「学生の個性を伸ばす教育方法が工夫されている」という項目に関しては、昨年度は低い評価をした学生が12%であった。今年度低い評価をした学生が増加したことは、遠隔授業・実習などの影響も考えられ、Zoomを使用した遠隔授業でいかに個性を伸ばす工夫を取り入れられるかも今後の

課題と考えられた。

II. 看護学部のディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の達成状況について

看護学部のディプロマ・ポリシーの達成状況は、9項目全てで“そう思う”“ややそう思う”といった達成度の高い回答が80%を超えた。卒業生が“そう思う”と回答した割合が多かった項目は「1. 看護専門職者として学習に主体的に取り組むことができる」(52.5%)、「9. 看護専門職者として対象となる人々と共に健康と幸福を追求し人間的に成長しようとする態度を示すことができる」(54.5%)であった。一方で“あまりそう思わない”“そう思わない”といった低い達成度の回答が多かった項目は、「6. 看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている」(14.1%)、「8. 看護専門職者として看護学の発展に貢献しようとする意欲を持っている」(13.1%)であった。なお、同項目の今年の“あまりそう思わない”“そう思わない”と回答した学生は各々5.4%、13.9%であった。「看護専門職者として必要な基礎的な看護実践能力を身につけている」という項目が昨年度と比べて低い達成度であった理由については、自由記載からも、新型コロナウイルス感染拡大による学習不足も関係していると推測された。

III. 自律性について

安藤（2005）^{*iii}の文献にしたがい、因子ごとに項目を並べ替えた。

自己決定に関する項目で、“あてはまる”が最も多かった項目は、「自分で決めたことには、責任を持とうと思っている」の52名(52.5%)であった。次いで、「自分が興味を持ったことは、一生懸命やることができる」の44名(44.4%)、「自分で決めたことをやる方が、やる気がでる」の40名(40.4%)であった。

独立に関する項目で“あてはまる”が最も多かった項目は「一人で決められないときには、誰かの意見が聞きたくなる」56名(56.6%)であった。

IV. 看護学部での学生生活のサポートについて

サポート体制の中で学生の評価の高かった項目（“そう思う”と回答した者が多かった項目）は、「事務職員の相談・支援体制は整っていた」(64.6%)、「国家試験対策は役立った」(62.6%)、であった。環境面では、「医心館の学習環境は整っていた」(52.5%)、図書館の環境は整っていた(51.5%)であった。

サポート体制の中で学生の評価が低かった項目（“あまりそう思わない”“そう思わない”の回答が多かった項目）は、「医心館の学習環境は整っていた」(19.2%)、「教員のアドバイザー制度は整っていた」(16.1%)、であり。環境面では「学食の環境は整っていた」(27.3%)が最も高かった。なお、学食について評価の高い回答をした学生は21.2%とすべての項目で最も低かった。

アドバイザー制度について評価が低かった理由については不明である。今後はアドバイザー懇談会等のさらなる充実が必要と考えられた。

V. 看護学部での学生生活の満足度について

学生生活の満足度の平均値は81.6%と高い満足度であったが、昨年度の86.6%に比べて低下していた。「70～79%」が最も多く32名(32.3%)であった。1名が「40～49%」と回答しているが、理由は未記載であった。満足度「100%」と回答した学生は12名(12.1%)であり、満足度「80%」以上と回答した学生は62名62.6%(70.3%)であった。満足度80%以上の

割合は、昨年度の 70.3%から若干低下した。

満足度の高い学生の理由は、学習環境の充実、友人・教員との出会い、自己の成長の自覚などであった。また、忙しかったが充実していたととらえていた。一方で満足度の低い学生の理由は、コロナの影響での学習の不足と大学の対応、人間関係の負担などであった。

VI. 看護学部でのカリキュラム、シラバスの構成、学生生活のサポートに関する意見要望 (自由記載)

看護学部での教育及び学生生活に対する意見・要望について自由記載で尋ね、回答のあった 99 名中 19 名 (19.2%) から意見があった。記載内容は「カリキュラム」、「実習」、「保健師選抜」、「看護技術」、「アドバイザー制度」、「国家試験対策」、「事務」に分類された。カリキュラムについては新カリキュラムに変更となった学年であり、学年による科目配置のバランスについての意見があったが、昨年までのような具体的な科目の希望は無かった。ただし、看護技術に対する不安や注射などの技術をもっと行いたかったという意見があった。実習では、教員による指導・評価の差を感じていた。また、保健師選抜における判定基準についても意見があった。評価や選抜に関しては、評価基準を明確に示すとともに、丁寧に説明する必要があると考える。

学生生活については、国家試験対策に対して満足しているという意見が多かった。しかし、教員やアドバイザーとの関係性に満足できなかったという意見、事務連絡を早めにしてほしいという要望があった。アドバイザーに関しては昨年度も同様の意見があり、引き続き、学生が効果的にアドバイザー制度を活用できるよう検討するとともに、学生にとって快適な学修環境を整えていくことが必要であると考えられる。

<まとめ>

看護学部卒業生に対して、カリキュラムおよびシラバスの構成、ディプロマ・ポリシーの達成度、学生の自律性と学生生活に関するアンケートを実施した (回収率 96.1%)。

カリキュラムおよびシラバスについて、卒業生は、看護について理解が深まる学習内容と評価していた。また、実習施設の充実さについて評価が高かった。ディプロマポリシーについては、達成度の高い卒業生が 80%を超えた。加えて本学部における 4 年間の学生生活の満足度は平均 81.6%であり、高い割合で満足していた。

しかし、看護における国際的視点を養う内容が不十分であるという評価は、昨年度と同様であった。また、Zoom の授業や実習が増えた中で、学生の個性を伸ばす教育方法の工夫を考慮していく必要があると考えられた。就職支援やアドバイザー制度の活用については、昨年度同様課題として挙げられた。

*ⁱ 安藤史高 (2005) : 大学コミットメントと自律性欲求・学修動機づけとの関連, 一宮女子短期大学紀要第 44 集, 91-99